HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本と中国におけるジオツーリズムの発展に関する地理学的研究［全文の要約］
Author(s)	肖, 錕
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13415号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74362
Type	doctoral thesis
File Information	Xiao_Kun_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称:博士（文学）　　氏名:肖　錕

学位論文題名

日本と中国におけるジオツーリズムの発展に関する地理学的研究

ジオパークは，地球科学的な価値を持つ遺産の保全を目的とした場所である。「ジオ(Geo)」は，地球や大地という意味の接頭語で，ジオパークとは，科学的に見て特別に重要で貴重な，あるいは美しい地質遺産を含む一種の自然公園である。地質や地形は，地球の歴史を物語っているだけでなく，人の暮らしや文化に直接結びついている。この大地の営みをひとつの遺産として学び，楽しむのがジオパークの一つの重要な功能である。ジオパークでは，大地の遺産を保全し，教育やツーリズムに活用しながら，地域の持続的可能な開発を進める仕組みを構築しようとしている。

GGN（世界ジオパークネットワーク）のガイドラインには「地質学的に重要なサイトを寄せ集めただけで，地域全体の地理的な背景に関連付けて扱われないものは，ジオパークとはみなされない」と述べられている。この記述から見ると，GGN はジオパーク活動において地理学の重要性を強調していることがわかる。しかし，各地域のジオパークの運営に携わっている関係者でさえ，ジオパークは地質だけを扱うものだと認識している人は少なからず存在する。また，運営担当者がジオパークは地質だけではないと理解していても，一般市民がジオパークは地質公園と認識していることがしばしば見受けられる。

ジオツーリズムはジオパークの 1 つの重要な功能であり，比較的に歴史の新しいツーリズムの形態である。それ故に，ジオパークやジオツーリズムとは何かを改めて整理し，ジオツーリズムの実態を考察し，今後これらの仕組みが根づいていくにはどのような利点や課題が存在するのかを検討する必要がある。この点にさいして，地理学が最も可能性が高い学問分野である。たとえば，ジオツーリズムは観光地理学での中心課題に位置づけられるが，自然環境と人間環境のかかわりの視点から地域資源を捉える必要性は，地理学の最も得意とするところである。具体的には，これまで比較的手薄であったジオツーリズムを中心とする人間環境へのアプローチにおいて，地理学の参画は不可欠である。

世界各地では，ジオパーク活動が盛んになってきたが，ジオツーリズムの発展は地域によって異なっている。しかし，重要な課題は，今やジオツーリズムはどのような形で展開されていくのか，また各地域のジオパークはどのような形で管理されていくのかということである。そこで，本研究は，日本と中国のジオツーリズムはどのような形態で展開されており，その地域差はいかなるものか，今後，どのような形態のジオツーリズムが発展の可能性があるのか，それを実現させるためにはどのような地域的条件が必要であるのかを，地理学の立場から解明しようとするものである。

本研究は，日本と中国のジオパークを事例として，それぞれの国でジオツーリズムが発展してきた要因と今後の課題を，地理学的な観点から解明することを目的とする。ジオツーリズムに対する分析の視点は，主体の立場によって，おおよそ四つに分けられる。一つ目はジオパークを管理する行政職員の立場，二つ目はジオパークを訪れる観光客の立場，三つ目はジオガイドの立場，そしてジオパークの地域住民の立場である。本研究の研究方法としては，まず，海外と日本におけるジオツーリズムに関する研究動向を検討する。さらに，日本と中国のジオパークにおけるジオツーリズムの実態を，フィールドワークを通じて実証的に明らかにするとともに，ジオパークの職員，ジオガイド，観光客および地域住民への意識調査を通じてジオツーリズムの特性を解明する。これらの理論的な研究と実証的な研究を通じて，日本と中国におけるジオツーリズムの地域差を明らかにするものである。

本論文は 9 章で構成される。

第 1 章では，従来の研究成果をレビューすることから，ジオパークとジオツーリズム研究の問題点を整理し，地理学の視点からジオツーリズムを研究する重要性を述べた。

第 2 章では，ジオパークとジオツーリズムの基本概念を提示し，日本におけるジオパークを関わる専門用語整理し，中国におけるジオパークに関する地理学的研究を検討した。日本におけるジオパークに関わる専門用語の整理から，ジオパークについての研究は，「ジオツーリズム」分野を除けば，学術論文がまだまだ少ないことが分かった。事例研究や実証研究となると，さらに限られる。中国におけるジオパークに関する地理学的研究について，論文の刊行年は，1989 年から 2002 年までに論文の数が少ない，2002 年以降に急激に増えた。中国におけるジオパークの研究は 2002 年以降に全面的に展開したことが分かった。中国のジオパーク研究は，1989 年から 2015 年までの間に，研究分野として， 観光学，自然地理学·測量製図学，地理学，地質学，資源科学がジオパークに注目されてきた

ことを確認できた。特に，観光学分野の研究論文が総数の三分の一を占め，研究成果が十分に蓄積できた。研究者の所在機構について，上位 3 位の機構すべては地質大学 (元地質学院) と地質研究機構であり，中国においてジオパークの研究者の殆どは地質学者の出身であることが分かった。

第 3 章では，テキストマイニングによる日本のジオパーク研究動向を分析し，日本ではジオパーク研究が時間的にいかに変化したのかを考察した。本章は，『文献』の研究論文等を分析し，2005 年から 2014 年までの日本のジオパーク研究の特徴を検討してきた。研究論文等を精読した上で，研究分野に基づいて分類した結果から特徴を検討するとともに，標題をテキストマイニングで分析した結果からも動向を検討してきた。その結果からは，次の 2 点が明らかになった。一つ目は，日本のジオパーク研究は，この 10 年間，研究分野として，地理学，地域開発学，観光学，教育学，地質学がジオパークに注目してきたことを確認できた。2005 年から 2009 年までは，教育学や地質学分野の研究は多かった。2010 年から 2014 までは多くの地理学や地域開発学，観光学分野の学者がジオパークを注目した。二つ目は，ジオパーク研究に関するキーワードについて，「活用」，「ジオパーク活動」，「事例」，「地域振興」，「大地」がよく出てきた。日本ではジオパーク研究は最初の地質学と教育学の視点から地理学，地域開発学の視点へ移行したと考えられる。

第 4 章と第 5 章は，日本のジオパークを対象として，ジオツーリズムの発展メカニズムを考察した。日本における最も歴史が早いジオパークとしての新潟県糸魚川ジオパークを取り上げた(第 4 章)。当時，最も若い日本ジオパークとしての苗場山麓ジオパークに注目した (第 5 章)。第 4 章は糸魚川ジオパークを事例にして，その発展過程ならびにジオツーリズムの実態と動向，そして糸魚川市におけるジオパークのまちづくりに関する取り組みなどについて考察することにする。その結果，糸魚川ジオパークは，長い歴史と豊な自然を有した魅力の多いジオパークであることが明らかになった。また，地域づくりの取り組みにたいして，地域行政が積極的に参画していることも明らかになった。第 5 章は，苗場山麓ジオパークを研究対象として，ジオパークにおけるジオツーリズムの現状と課題を探ることを試みた。その結果，苗場山麓ジオパークでは，地域住民の参与が高まり，ジオパークも環境教育の資源として活かしている。しかし，日本の行政機関はジオパーク活動に対する支援がまだ不十分であることがわかった。

第 6 章では，中国におけるジオパークにかかる法律を中心に，法律·制度·認定システムの各面からジオパークの成立理由を整理した。また，ジオパークの成果と問題点を示し，

今後ジオパークを展開していくための課題と対応策について考察した。ジオパークの成果について，一つ目は，3,000 か所以上の地質遺跡を保護することができた。127 か所の博物館，21,000 の科学解説看板が建てられた。二つ目は，187 か所の科学普及教育基地が建てられ，科学普及教育を受けた人数ははすでに延べ 1.3 億に達した。ジオパークにおいて，科学報告会，中小学生の夏のキャンプなどの活動は 585 回数に達した。三つ目は，ジオパーク所在の地元の経済発展と農民の就職を促進して，ジオパーク公園の生態環境も改善した。中国におけるジオパークの課題はジオパークの専門法律を制定，専門管理機構を設置，ジオガイドを育成していくことと考えられる。課題解決のための対応策を提案した。

第 7 章と第 8 章は，中国のジオパークを対象として，ジオツーリズムの発展メカニズムを考察した。第 7 章は，雲南石林ジオパークを事例とした聞き取り調査およびアンケート調査をとおして，ジオツーリズム発展の実態と課題を把握することを目的に論を進めてきた。その結果，雲南石林ジオパークでは，ジオパークを訪れる観光客は多く，ジオパーク所在の町の経済成長を促進し，同時に自然環境，生態保全の悪化という厳しい課題をもたらした。雲南石林ジオパークは地元の政府を観光資源として開発し，地域経済の発展と密接に関わっている。逆に，地域住民はジオパーク開発との関わりが少ないことがわかった。第 8 章は，湖北五峰ジオパークを対象に，職員に対する聞き取り調査および地域住民へのアンケート調査から，ジオツーリズムの発展に関する意識を考察した。その結果，五峰県では，地元の経済成長を図るにはジオツーリズムによる取り組みが有望であることを明らかにした。さらに特筆すべきは，ほかの中国国内のジオパークにはほとんどみられない，製茶業の繁栄という地域特徴を巡るジオツーリズムのあり方を早急に検討すべきである。

結論章 (第 9 章) では，日本と中国のジオパークおけるジオツーリズムの特徴と課題を整理して比較した。それらを踏まえて，日本と中国におけるジオツーリズムの方向性について，若干の提言を行う。そして，最後に全体の結論と今後の展望を述べた。